

東北 VALUE SIGHT 宮城



農業生産法人 株式会社舞台ファーム 代表取締役
針生 信夫 (はりう・のぶお)

1962年、仙台市生まれ。
1982年宮城県立農業講習所卒業。
2003年に舞台ファーム設立。仙台市認定農業者連絡協議会会長、宮城県総合計画審議会審議委員などを歴任。
2015年12月付で国有財産東北地方審議会委員に就任。

株式会社舞台ファーム
宮城県仙台市若林区日辺字田中11番地
<http://butaifarm.com/>

農業を取り巻く現状は厳しく、農家の高齢化や後継者不足など、課題が山積している。そのような中、株式会社舞台ファームでは、生産のみならず、生産物の加工などに事業を拡大し、さらには農業者の連携やお米文化の推進、人材育成など、これまでの農業の枠にとられない革新的な取り組みを続けている。

転換期を迎えるからこそ、 イノベーションを起こす農業生産法人に

震災を乗り越えた広域連携型農業

株式会社舞台ファームは仙台市若林区の広瀬川沿いに位置し、野菜・お米の生産・販売および農産物の加工・販売を行う農業生産法人である。社長の針生信夫は農家の15代目にあたり、若い頃から地域の生産者リーダーとして地元の農業者を率先してきた。2003年、日本農業の未来を見据え、旧知の生産者と舞台ファームを設立し、今年で13年目を迎える。

生産に特化した事業形態にとらわれず、2010年には、野菜のカット加工事業に進出。生産～加工～流通～販売をワンストップで行い、「赤ちゃんでも安心して食べられる野菜」を標語に掲げ、現在では大手コンビニエンスストアとベンダー契約を結び、商品の供給を行うまでになった。

設立以来、各事業が走りだす中で2011年の東日本大震災が起きる。舞台ファームが保有する農地や倉庫などの設備の約60%が被害に遭い、今後の見通しが立たないほど経営的な大打撃を受けた。不測の事態に遭いながらも、会社は炊き出しなどを行い地域を支援した。ここから会社の運営にかかわる発想の

転換が生まれる。それまでの「攻め」一方の手法から、「広げる」という方針の切り替えを実施。それまで農業者にありがちな産地間での競争型農業からいち早く脱し、共同で取り組む広域連携型の農業経営に自らをシフトした。日本各地へ出向き、地元の農業者と対話を重ねて行くことに力を注いだ。徐々に賛同者も増え、現在では約650ヘクタールの農地を連携先として持つまでになり、安定した生産物の確保に成功した。今後もさらなる拡大を目指し、日々全国を飛び回っている。

TPP、2018年に迎える米の生産調整の終了、生産者の高齢化による離農など、現在日本の農業は、大きな転換期を迎えようとしている。来るべき農業変革にさらなるイノベーションを起こすため、新しい取り組みを実践している。

消費低迷を覆す、 お米による食文化の創造

現在国内においてお米の需要量は低下の一途を辿り、2015年時点での見込は770万トンと、過去20年の間に約2割も減少している。こうした現状下、お米の流通と販売に農業の新たな活路を見だし、被災地域への復興支援のため、2013年にアイリスオーヤマ株式会社との共同出資で舞台アグリイノベーション株式会社を宮城県亘理町に設立した。およそ22,827㎡の敷地内にある精米工場から、日本初の低温保管・低温精米・低温包装のトータルコールド製法を用い、美味しくて高品質な商品を多くの消費者

に届けている。

現在は製餅商品の原料として連携先の農業者と加工用米（モチ米）の生産に取り組んでいる。生産者は、アイリスフーズという実需者と契約することで安定的な収入を得ることが出来る、双方にとってプラスの仕組みになっている。現在は、さらなる生産面積の集約を加速させるため、各地の農業者と話を進めている。

さらにお米文化の推進として、「米・食味分析鑑定コンクール国際大会」でダイヤモンド褒賞を受賞している山形県・高島町の遠藤五一さんが監修する、各地で生産されたお米の食べ比べセットの商品企画を進めている。お米というものがいかにおいしく、日本人の食卓に欠かせないものであるかを再認識してもらうことが目的の一つだ。本年は、お米の食文化の創造と、より大きな発展に努めたいと考え、舞台ファーム直営の農場で遠藤さん監修のもとお米の作付を予定している。

農業衰退にストップ！ アグリ再生へのチャレンジ

農業者と直に話をすると、高齢化による離農に留まらず、地域の状況を憂う意見が多くなっている。2年後に米の生産調整が廃止されるタイミングで、農家として後を継がせず離農を選択し、その農地の多くは放棄されることも予想される。農業を地域における主たる産業としている自治体が多いだけに、深刻な話ばかりが聞こえてくるようになってきた。

舞台ファームでは、この状況を一新する取り組みも開始している。将来に不安を感じている農業者・農業生産法人に、舞台ファームが持つ仕組みや人材、販路の提供を行い、課題を一緒に解決していく。また農地の集約も行い、より広域で生産性の良い農業を目指す。経営的なフォローをしっかりと行うことで、生産者が収益を得る仕組みを確立させる。最終的には生産者同士が切磋琢磨し、その地域全体のアグリ再生までつなげていくことが大きな目標である。

「グリーンカラー」への取り組み

各現場で活躍することを目的に、新たな人材育成も開始した。これまでの農業は汗を流し収穫を行う、といった肉体労働を基本とした技術職のイメージがあり、いわゆる「ブルーカラー」と言われる職種に近いニュアンスでくくられることが多かった。今後の日本の農業は、先述したように大きな変化が訪れる。その状況下にあっても歩みを止めず発展していくためには、技術面に加え、ITを活用した生産やデータの蓄積などの管理スキルはもちろん、マーケティングや営業、経営的な部分まで対応できる「ホワイトカラー」の側面が必要になってくる。ブルーとホワイト両面を兼ね備えた人材を舞台ファームでは「グリーンカラー」と呼び、育成に励んでいる。農業は企業体にしろ、個人にしろ高い技術力と強い経営資質を持って、変化の時期を迎えなければあっという間に淘汰されてしまう時代に入ってきた。そういった状況でも負けないように、会社の中で育ったグリーンカラー人材が、将来、日本の各地において自身の力で新しい農業を実践し、イノベーションを起こしていくことに期待している。



株式会社舞台ファーム 全景